

ゆるり

公式 HP



第 2 号

主な活動拠点が東京近郊であるカンパニーの活動は児童劇や一般公演、高齢者施設等でのレクリエーション、その他イベント活動や MC 等々です。それらの活動内容紹介のための不定期発行の広報紙です。

お芝居やさん鈴木 KE 企画カンパニー情報紙 発行年月：2024 年 12 月

発行：お芝居やさん鈴木 KE 企画カンパニー 制作部

お芝居やさん鈴木 KE 企画カンパニーホームページ：https://suzukikekikaku.com

宣材写真撮影終了！

8月末、まだまだ夏の盛りには渋谷駅近くのフォトスタジオにて撮影会を行いました。ビル群が立ち並ぶ渋谷駅前には最近の駅前開発の影響でも増して複雑になり、慣れていないと迷いやすくなっています。



撮影場所

スタジオ集合にしてたのですが、SOSの誘導だと返って迷ってしまい、たどり着けないアクシデントもありましたが、無事に撮影会が始まりました。撮影はもちろん駒山睦望。下見は予め行っていたものの、ここでの撮影は初めて。「スタジオに来る



迷子中



撮影の様子

風景裏側取材のため桜も参戦しました。仲間内での撮影だったので緊張も少なく和気あいあ

ました。先輩たちを先導して、自分で企画して指導しながらやったので、かなり緊張しましたがこのことでした。全然そうは見えず。始まってしまえば順調に撮影は進みました。今回の撮影に参加したのは、藤本、山崎、西原、渡口、柿崎、村野、駒山、それに佐藤が加わり、撮影

まで気持ち悪くて吐きそうになりま

いと楽しくできた、勉強になった、改めて身が引き締まる思いがした等々、良い経験にもなりました。新しいお芝居をどんどんやって行きたい。大きい劇場でやってみよう。児童劇公演ももっと増やしたい。」と皆の意欲も増進。十一月の公演に向けてより一層団結力も増したかも。早速公演のチラシにも撮影写真が使われていました。「昔所属していた劇団で上演していた、ファンタジーものを第二世代が若いうちにやってみよう」と、演出の佐藤誠の意欲まで刺激したようです。



おじさまと美女

祝！第二世代初公演

去る十一月一日〜四日の四日間、西荻窪の「遊空間がぎびい」において「歪んだグラスで、哀を知る」を上演しました。

第二世代を中心としての初公演。発案者は演出初挑戦となる藤本龍也。脚本はカンパニーメンバーになりつつある安田聖也による書き下ろし。第二世代以外のメンバーを募集、公演までのスケジューリング、舞台装置の手配等々、第二世代が主体で動くのは初めて。内容はミステリー。黒、白の2チームに分かれそれぞれでラ



黒チーム (バーカウンターにて)



白チーム (テーブル側にて)

話、プレオープンの中から始まる、そこにかつての同級生が偶然集まってくる。女性のバーテンダーの作るカクテルが話の謎を深めていく。その雰囲気、こだわった舞台装置と音響、それから今回参加してくれた四人の客演さんが盛り上げてくれました。安田聖也は藤本の友人で、既にカンパニーでの客演経験者。

「童処」はフリーマーズの頃から繋がりで、こちらからは是非」と熱烈オファーをしたそう。参加。佐佐木美美と野田芽依はカンパニー初参加。佐佐木が藤本、安田の友人で、二人がタッグを組んだプロジェクトに興味を持ち、野田も巻き込んで参加に立候補してくれました。第二世代のやる気に個性的でパワフルな客演メンバーが加わり、見事なハーモニーを奏でた今回の公演。いつもとは一味違ったカンパニーを楽しんでいただけ

今後の活動予定

- 12月 障害者ふれあいフェスタ イベントスタッフ
- 中学校朗読発表会
- 高齢者施設公演
- 1月 上半期総会開催
- 3月 高校公演

※児童劇活動については不記載

昭和の玉手箱

テレビとお供え餅

「お供え餅」が各家庭から無くなりつつあるのは、ブラウン管テレビが消えたせいではなからうか。

かつては床の間に存在していたが、より注目の集まるお茶の間のブラウン管テレビの上に必ずと言って良いほど鎮座するようになった。うちのオリジナルで「二年目のお目覚め」という作品があり、十年に一度、限られた少しい時間だけ目覚めるお人形たちが、動けない間の世間の変化に驚くシーンで、薄型の液晶テレビに出会い、「これじゃ、お供え餅も置けないよお」と嘆く台詞がある。

一九五三年二月一日、玉手がテレビ放送を開始してから、一九六四年の東京オリンピック期にカラーテレビが出回り、昭和三種の神器家電の一つとなったブラウン管テレビ。映りが悪くなると上から叩けば復活するという特技を持ちながら着実に生活に入り込み、小型化が成功してからは家に一台どころか一部屋に一台は当たり前のように普及して行った。それでもやはり、茶の間のメインテレビの上には「お供え餅」が(笑)

平成で地デジ化され、チャンネルやメディアの多様化が始まった令和には、すっかり姿をくらませた「お供え餅」。時代が変わると変わるもの、また、変わらない方が良いものもあるが、空間が無くなってしまおうと、その存在、価値、はたまた文化まで淘汰されて行ってしまう。カンパニーも第二世代が力を発揮し出した今、老トルは淘汰されてしまわうのか。いや、ここからがわしらの世界じゃ、ボケっ！

代表取締役社長 鈴木雅也

児童劇、イベントスタッフ、MC 等のご相談は

お芝居やさん鈴木 KE 企画カンパニー

お問い合わせはこちら e-mail s-masaya@f5.dion.ne.jp
Tel 03-3395-6394
携帯 090-1819-2216

お芝居に興味ありませんか？
児童劇・一般公演等に出演してみたい方募集中！

公式 SNS : Facebook、X(旧 Twitter) やってます。

検索 お芝居やさん

カンパニー すべしゃる

2024年11月に、平成生まれの第二世代初の企画公演「歪んだグラスで、哀を知る」が無事終了。今号は本公演の主宰兼演出の藤本龍也及び本公演を支えてくれたスタッフへのインタビューと古参メンバーの役者紹介を掲載しました。

2024年12月



カウンター



ホール

藤本・演出をしたというよりできなきやダメだなと思ったのがきっかけです。これから先活動を続けていく上で自分の立ち位置やみんなに与えられる影響やできることはこれしかないと思いやらせてもらいました。

脚本に関しては自分が演出する上で自分が作った本の方が舞台を作りやすいと言ったこと、いつものカンパニーとは違うものをと考えていた。



場当たり時



藤本龍也

役者
リバーシの発案者
今回の公演の企画
演出を担当した

・第二世代で公演をしようと思ったきっかけを教えてください。

藤本・第二世代のみの公演をやりたいと言ったのは僕です。単純にカンパニーでの活動だけでも五年はお芝居を作ってきた、今までの経験やこれからのに向けてのチャレンジ、個人的ではあります。演出への興味、そして何より自分たちの力で公演をできなきや未来がないなと思いついた今回の企画を立てました。

・演出がしたい！と思った動機を教えてください。

・今回の公演はカクテルバーが舞台でしたが、それを選んだ理由やこだわりは？

藤本・頭の中で作りやすかったのがきっかけだったと思います。そこは聖也と脚本を作りながら何となく決まっていた感じですね。こだわりはすごくたくさんあるのですが全部は言えませんが、脚本に関してはパッドエンドの最後はこだわりました。

演出としては何より台詞劇ながら見られる人を飽きさせず、一緒に考えながら見られるようにキャラクターの個性や背景、ストーリーの内容がわかりやすく伝わるように作りました。

・お客様や今回の公演に関わった人に何か伝えたい事、反省点や今後の目標みたいなものがあれば。
藤本・感謝しかありません。反省もたくさんあるのでもう切れないですが、これからは面白いものを作れるように頑張ります。目標としては一年に一回くらいは自分でまた演出して公演をやりたいなと思います。あと元々役者なので自分の作っている作品にも出れるよう頑張りたいです。よかったですら応援してください。

・今回の舞台装置等でのこだわりを教えてください。

山崎・劇場をちゃんとBGMにする作業は楽しかったです。実際にカクテルを作ったり一品ずつ紹介があったり、ドリンクを飲んだりとやり取りがある中で、セットで脚本の世界観を出しつつ、俳優さんが役になって生きている。観客の皆様が見やすい空間を作る作業を、ワイワイ賑やかにやれたのは宝物の様な時間でした。「良い感じのBGMだな」って感じてくれていたら嬉しいですね。

西原・小道具の苦労したところはポトル集めてですね。知り合いの飲み屋さんで協力してもらって集めたんですけど、持ってくるのが本当に大変でした(笑)カウンター奥にこっそり並べてた某有名漫画のコミックにも気付いてくれた人がいたみたいで、そういうのに気付いたり見てもらえたなら色々考えて置いたりしてるかいて嬉しいですね。
・黒白のチームでラストが違つのに合わせて、ラストシーンで流れる曲が話題になったようですがこの曲にしたのは？

役者紹介



佐藤誠
さとうまこと

出身は北海道
鈴木 KE 企画初期からのメンバー。
桜とは前の劇団からの付き合いである。フリーマーズ時代から役者としては勿論、脚本、演出を担当。イベント等でのスタッフ、舞台監督としても活躍している。

・上京したきっかけは？

四十四年前、札幌で「歌手になりませぬか？」とスカウトされイノコソコ上京。でもそれがインチキ事務所だった。でも中学の頃から役者に憧れがあり東京で勝負したいとは思っていたので、「まあ良いっか」と役者にソフトチェンジ。

と言われたのが大きかったなあ。

・カンパニーのお芝居では、主に演出をされていますが、演出をしていて良かったと思えた事はありますか？

自分のやりたい形を表現出来る事かなあ。その分、全責任を負う事になるけど。文章(脚本)を舞台上で形にするのは快感ですね。いつも自分の思い描いている以上の作品が出来上がるんです。それがみんなの力なんだとつくづく教えられます。



昔の佐藤

・鈴木 KE 企画に加入した時の事を教えてください。

代表、雅也氏に『持っている技術を若い奴に何故伝えないの？何もせず死んで行った良い役者さん沢山知ってるよ？』百ステージ以上公演やりまわした。黒も白も歌詞を見て選びましたね。黒の「ルル」はバーテンから全員に向けての曲になると思いましたが、黒は報われない終わりだからこそ、バシツとかっこよく終わりたいだったので。
白の「夏実」はゆうすけから臆月に対しての曲になると思いましたが、全員が前を向いてこれからは歩いていけるような前向きなメロデー感と歌詞が合ったのでこの曲を選びました。どちらもかなり使いにくい曲だったと思いますがどうしても使いたかったのです。

・自分が演じた役で一番やりがいがあったものは？

故、今井雅也氏の作品『MISOGYNY』の兄貴役か。他劇団にて全国五作品で、一番好きかも。後は『カツ丼』……俺の作品は食い物ばっかりか？

・カンパニーで一番好きな演目は？

『三つを経て書いた』『らつきょう』かなあ。自分自身、戦争作品に決着つけたかったのが強くあったなあ。団員の若い奴等が居てこそその作品で、一番好きかも。後は『カツ丼』……俺の作品は食い物ばっかりか？



WINS OF GOD のとき



龍也さんがわがまま聞いてくれて上手く演出してくれななと思っっています。感謝しています。

今、北海道にて両親の介護生活を送っています。なかなか帰京出来ず、在京時間も短いですが、ご迷惑をお掛けしております。まだまだ芝居人の炎は熱く燃えております。これからもヤンチャな六十二才のジジイを宜しくお願いします。



美瑛にて

